

イギリスの高等教育と ESD

(<http://www.heacademy.ac.uk/misc/executivesummary.pdf>)

高等教育における持続可能な開発：現状と今後の展開 —高等教育アカデミー(Higher Education Academy)への報告—(仮訳)

(要旨)

2005年11月

ジェラルド・ダウ、ロルフ・ジャッカー、ステファン・マーティン

(Gerald Dawe, Rolf Jucker, Stephen Martin)

「地球環境に対する人間の攻撃は弱まる気配はなく、地球外環境にまであふれ出る兆しも見える。・・・このような破壊を前に、多くの人が愕然としている。・・・この破壊が自分たちや子供たち、友人、他の生き物、バイオマス（地球上の自然）そして自分たちの住む惑星に対して持つ意味が愕然とする理由だ。このような反応は多くの場合倫理的な反応であり、人々は今起こっていることが単に厄介で不都合な、落胆させるもの、あるいは不運なことだというばかりではなく、不道德で悪いこと、間違ったこと、あるいは邪悪なことでもあると判断するのだ。」

Elliot, 2001, Normative ethics, In:(editor, D. Jamieson)

A Companion to Environmental Philosophy

はじめに

英国の新しい持続可能な開発戦略(sustainable development strategy)—*Securing the Future: delivering the UK sustainable development strategy (2005)*（未来を守る：英国の持続可能な開発戦略の遂行 2005年）は、持続可能な開発に関する若者の意識を啓発すること(awareness among young people about sustainable development)、および若者に持続可能な開発を実践するスキルを与える(giving them the skills to put sustainable development into practice)上で教育の重要性を強調している。大学生に持続可能性リテラシー(sustainability literacy)をコア能力として涵養することを最優先事項としている。国連「持続可能な開発のための教育の10年：2005–2014」(the United Nation's commitment to a Decade for Sustainable Development)でも同様のことが強調されている。

高等教育アカデミー(Higher Education Academy)では、私たちに以下のことを委託した。

(1) 「高等教育における持続可能な開発：現状と今後の展開」に関する調査研究

(2)参加する各サブジェクトセンター(Subject Centers) (SC)¹が、それぞれのサブジェクト(科目)に関わる人々の間で持続可能な開発のための教育(ESD)がどのように位置づけられ、どう理解されているかを調べるためのプロジェクト。両者は、別々に実施されたが、結果はいずれもこの報告書にまとめている。

この報告書は、高等教育システム内で教えられている、異なる学問分野・科目が、持続可能性リテラシー²をもった大学生を育成する上でどのように寄与しているかについて6ヶ月間調査した成果をまとめたものである。アカデミーでは、この調査で授業方法やカリキュラム開発の良い実践例を見出すこと、**教育機関での教育・学習戦略に持続可能な開発を組み入れる(embedding sustainable development in institutional teaching and learning strategy)**のどのような障壁が存在するかを明らかにすること、また組み入れプロセスを広げ、深めるにあたって求められる支援とは何かを検討することをねらいとした。

調査全般を通して慣例的ではない、オープンで参加型の手法をとった。

この調査は、ESDの現状についてざっと評価したものであり、包括的な論評ではない。それでも、英国にある**高等教育機関(Higher Education Institutions)**におけるESDおよびその実施状況をはじめて学際的・総合的に調査した結果である。

主な結果

指導および学習

調査の結果、アカデミーの24のサブジェクトセンターが対応している学問・科目分野で、学生の持続可能性リテラシーへの寄与が明らかとなった。しかし、多くの大学職員が、ESDは各々の科目を展開していく上で重要な要素であると考えているものの、何をどう教えるか推論でとらえており、ダイナミックに変化している状況である。進捗状況をまとめると、取り組みがかなり行われており **good practice** も様々あるが、影響力の大きい学問分野の一部で持続可能な開発の位置づけが低いかあるいは存在していない一方で、他の分野では位置づけが高まっているなど、全体としてみると状況は一様ではない。ただ、**行動志向で持続可能性リテラシーをもった大学生(an action oriented sustainability literate graduate body)**を生み出すためには幅広いスキルや知識が必要であることは広く認識されている。

このようなスキルや特性を教えることは、従来の方法では容易ではないが、学際的志向や問題解決、チームワーキングなど、スキル養成の支援となる指導方法の新たな方向付け

¹ サブジェクトセンターは、高等教育で教えられている主な科目、芸術、デザイン、コミュニケーション(ADC)、数学、統計、オペレーションリサーチ(MSOR)、心理学、社会政策、ソーシャルワーク(SWAP)まで扱っている。教員を支援するため様々な活動を行っている。

² **持続可能性リテラシー(sustainability literacy)**は、人間の行動が、私たちの社会の経済や生態系の将来に短期的、長期的にどのような影響をもたらすのかを学ぶ事である。資源が無限ではない地球でどのように生活し、働くことができるかと関わっている。

や手法の例も増えている。この調査の結果、持続可能な開発についての教育で広がりつつある方向性が3つあることが明らかになった。

- ・ **ロールモデル、学習者としての教育者(Educators as role models and learners)**。持続可能性の原則や実践の現実について信頼性のあるしっかりした見通しを学生に与えるために、教員がロールモデルとしてどう行動すべきかに重点をおいている。
- ・ **実生活と結合させて行う経験的な学習(Experiential learning by reconnecting to real-life situations)**。学習環境として実生活上の問題や実体験に焦点をあてている。
- ・ **全体論的思考法(Holistic thinking)**。持続可能な開発についてのスキルや知識の多くは、複雑かつ多層的で、相互に関連しあったシステムと関わっている。このアプローチには、関連のある科目同士の相互依存性や、学際的なつながりを意識的に探求することや、**批判的思考(critical thinking)**を育成し磨き上げるためのアプローチを組み入れることも含まれる。

カリキュラムの対応

持続可能性の課題に応じて、カリキュラム間で幅広い関連性があることが調査の結果確認された。学問分野によっては、気候変動、生物多様性、環境管理システムなど、関連するテーマを導入している場合もある。しかし全体としてみれば、持続可能な生産と消費、エコ効率、各国内および国際的な持続可能な開発政策などの分野では大きな差異があり、ばらつきが見られる。

調査の結果、学問・科目分野によるESDへの対応で3つのカテゴリーがあることがわかった。

1. **ESDカリキュラムを学部および大学院のプログラムに組み入れるための主要プロセスを採用したサブジェクトセンター³**。例えば、工業プロセスの日常的な現実を扱っている工学および材料科学分野や、「エコリテラシー」について強い伝統がある英語学、地理・地球環境科学などがある。
2. **カリキュラム内容の面でESDを組み入れる機会がある分野であることは認めつつも、ESD組み入れはあまり進んでいない学問・科目分野**。例としては、生物化学、経済学、ホスピタリティ、娯楽、スポーツ、観光、哲学、宗教学などがある。
3. **ESDに関心はあるものの、カリキュラムにESDを幅広く深く組み入れることはかなり困難だと考えているサブジェクトセンター**。例としては、情報・コンピュータ科学、数学、統計学、オペレーションリサーチ、公演芸術、心理学などがある。

³ この報告書においては、サブジェクトセンターはほとんどが**フォーカスグループ(Focus Groups)**という科目の実践者（学問分野の代表者）やサブジェクトセンターのマネージャーからなるグループ経由で情報、意見を聞いている。時には、サブジェクトセンターのマネージャーから直接情報・意見を得た場合もある。一般的に、「サブジェクトセンター」および「学問・科目分野」という言葉は、このようなグループ分けをさし、ほとんど同じ意味で使われている。詳しくは付属文書6と7参照。

調査によって明らかになった、最もすぐれた実践例には、具体的な特徴として2つの形がある。

1. 学問領域の境界を広げ、関連のない他の領域も取り込むようになっている科目。例としては科学と人文学。
2. 教育機関の環境改善の実践と密接かつ継続的な関連がある科目。

ESDを組み入れるにあたっての障壁と解決法

調査の結果、高等教育の学問・科目分野で多くの場合、ESDをうまく組み入れるにあたって大きな障壁が4つあることが明らかになった。

1. カリキュラム過密(Overcrowded curriculum)
2. 大学職員の対応の不適切性(Perceived irrelevance by academic staff)
3. 職員の意識・ノウハウ不足(Limited staff awareness and expertise)
4. 教育機関の取り組み不足(Limited institutional drive and commitment)

一方の極端な形としては芸術と人文学で最も障壁が多く、もう一方では社会学、構築環境、環境科学では比較的少ない。たとえば、公演芸術科目には障壁が少なくとも10あることがわかった。科目分野とすんなりと調和しない、職員のノウハウ不足、関連性の欠如、金銭面での制限、教育機関の取り組み不足、といった障壁である。英語学では障壁が9あるが、特に生態学的な概念を文学理論上の概念に翻訳することが困難であることと関わっている。他の科目分野では、持続可能な開発には学問的な厳格さが不足しているという問題、および内部の承認・認可システムに関わる問題が挙げられた。

解決策

サブジェクトセンターは、それぞれの障壁に対して解決策を見出した。

障壁	解決策
カリキュラム過密	既存のカリキュラムを見直し、空きを作る。
不適切性	科目分野に応じて十分に関連付けられ、実地的意味のある、信頼性の高い教材を開発する。
職員の意識・ノウハウ不足	職員の研修、能力育成に大きく投資する。
教育機関の取り組み不足	高等教育機関に対し、信頼性の高いビジネスケースを開発し、三重のメリットを示す。 教育機関の目標、方針を見直す。

報告書の結論

この報告では、高等教育機関で教えられている多くの科目分野における **ESD 組み入れ (embedding ESD)** の現状を述べており、また組み入れ上の障壁と解決策を示した。この報告書の意義は、英国の高等教育セクターを構成している学問分野で実践している人々の見方を反映していることにある。組み入れの程度はまちまちで、重要な学問分野の中にもあまり進んでいない分野があるものの、この調査では組み入れプロセスを支持する形で更に行動すべきであることを強く示す論拠を提示している。このため、この報告書では、アカデミーとそのサブジェクトセンターが以下の形で **ESD** の推進を強化することを勧める。

1. **HE** における全学問・科目分野にわたって、良い実践例についての情報を伝えることも含め、**ESD** 開発を推進するため、支援資金を提供すること
2. **ESD** と雇用可能性とのつながりを探ること
3. **HE** 卒業生がキャリア機会を選択する時、**SD** 課題によって影響を受けるかどうかを調べること
4. 雇用者、専門家団体、専門職についている卒業生などによるステークホルダーグループを作り、指導、学習、カリキュラムに **ESD** の実施、支援を組み込むための創造的手法を見出すこと

持続可能な開発のための教育 (**ESD**) は、**新たな緊急の責務 (an emerging imperative)** である。高等教育セクターで学生がどう指導され、学ぶかに大きな変化をもたらすものである。各学問分野の開発や指導法により幅広く柔軟なアプローチが求められる。変化の多くは、卒業生が今後一層複雑化する労働環境で必要になってくることと一致している。これらは、アカデミーおよびそのサブジェクトセンターが取り組むべき課題である。